

第一次大戦後における一年現役兵教育

一ノ瀬俊也

Post-WWI Military Education During a Year of Active Duty

はじめに

- ① 軍隊教育における日記の機能
- ② 國際情勢・未來の總力戦への即応
- ③ 一年現役兵の使命とは何か
- ④ 「植民地」朝鮮の教育としての意識
- ⑤ 軍隊経験の意義深さ
- ⑥ 一般社会における「背広の軍人」
おわりに

〔論文要約〕

本論は、京城師範学校卒業生四五名が一九一四年四月、朝鮮龍山歩兵第七九連隊に一年現役兵として入営した際、各人が教育の一環として日々書かされた日記より主要な部分を抜き出して一年三六五日分の「軍隊日記」に編集、除隊後の二五年公刊した『凝視の一年』の内容分析である。第一次大戦後、まさに反戦反軍思想が最も昂揚した時期の兵営内で、未来の小学校教師として「国民教育ト軍隊教育トノ連携」者たることを期待された兵士たちは、軍隊の存在意義についていかなる説明を受け、どのように理解していくのだろうか。

分析の結果、一年現役兵たちは単に「忠君愛國」といった抽象的な題目だけでなく、国際連盟の無力、アメリカの脅威という具体的な國際情勢との関連から軍隊の存在意義を教えられ、かつ日常生活においてそれを兵営外部一般社会に對して語っていることが確認できた。彼らは軍隊生活を「國民学校」と称するに足る、以後の人生に

とて意義深い体験として認識していた。彼らの語りの内容は、当該期の軍が自己の存在意義をどうに求め、國民に正当化しようとしていたかを示している。強制された「日記」は、教育の内容を日々咀嚼し、自らの言葉として発話させるための装置に他ならなかった。

もちろん、そのような軍の論理が一年現役兵たちにおいて完全に内面化されていたと即断するつもりはないが、『凝視の一年』の刊行 자체、彼らが教えられた軍の論理を主体的に一般社会に向けて伝達しようとする行動であった。そうした彼らの思考の枠組みと実践は、通常反軍平和思想の高揚というイメージをもつて語られることが多い大正期と、後年の戦時動員体制期との「連續性」という問題を考えるとき、きわめて示唆的な事実であると考える。